

辻邦生『ある生涯の七つの場所』における社会思想家

1997/ 不明

石塚秀雄

1. 日本と西洋 1920s-1970s の小説的入れ子型精神史

辻邦生（1925-1999）の小説の中に、『ある生涯の七つの場所』がある。15年を掛けて完結したこの挿話小説は、全体で百の短編を七つの色（黄と赤の挿話、緑と橙の挿話、青と藍の挿話がそれぞれ交互に進み、最後に堇の挿話）が、それぞれの色の挿話は各14篇として構成され、それにプロローグとエピローグが付せられて、計100の連作長編として構成されている。独立した短編として、また同時に、長編の味を持つ連作として読める、というのが作者の意図であった。多くの主人公が登場し、時代も1920年代から1970年代にいたる50年以上にわたるなかで、物語は時空を越えあるいは交錯し、いわば挿話の連続であるので、この小説の全体像は複雑なモザイク模様となっている。物語のはじめの主人公の「私」は二人設定されている。しかし、このことを読者がわかるのはずっと読み進めてからである。

「黄色い場所」の1950年代の私は、「赤い場所」の昭和10年代から始まる「私」の息子である。物語は、最初、この二人の私の物語、すなわち黄色と赤色の場所の挿話が交互に語られる。黄色の私はフランスを中心に恋人エマニエルとともに研究生活を送っている。昭和10年代の私は、父がアメリカ、ヨーロッパに遊学して戻ってこず、病身の母と一緒に暮らしたり離れて暮らしたりしており、その後松本の旧制高校、東京大学に進みドイツ文学を専攻するが、徴兵され戦死することになる。赤い場所はそうした若者のビルディングスロマンの性格も兼ね備えた物語である。緑の場所また西洋人が挿話の主人公になる。彼らの多くは、フランスの人民戦線運動やスペイン内戦などに関わった人物で、なんらかの心の傷を負った人物たちとして登場する。

しかしこの小説が政治的な出来事に特定の政治的な解釈に力点を置いているということは全然なくて、それはあくまでも人々の人生における物語の要素として大きな影を落としているという形となっている。それはたとえば、政治運動における裏切りや殺人であったりする。一話完結型の挿話であり、登場人物も一見脈絡がない。「ある生涯」とは、いわば多数の生涯という複数型である、と作者は述べている。このタペストリーのように織られている物語であり、論者にとって興味あるのは、欧米で研究行脚をする二人の日本人の研究者が狂言回しとして登場していることである。一人は、農業経済研究者である「私」（祖父）であり、もう一人は「私」（子）が学問的研究対象としている宮辺音吉という日本の社会思想史の上で大きな業績を残したとされる架空の社会思想史研究者のヨーロッパでの足取りである。

すなわちこの物語は、1920年代にアメリカやヨーロッパで研究調査活動した私（祖父）、1930年代の軍国主義的な時代を過ごした若者である私（父）、その息子である1950年代をヨーロッパで研究調査活動をして過ごした私（子）、最後のエピローグではその息子である青年の僕（孫）という4代にわたる私の物語でもある。それらの私に関連するのが架空のヨーロッパ社会運動研究者である宮辺音吉であり、歴史的背景としてのスペイン内戦なのである。いちばん古い私と宮辺音吉は、アメリカでの調査研究上で共通の知人を持つが、私がヨーロッパにいったときに宮辺音吉は軍国主義の日本に入れ違いに戻り逮捕される。三番目の私は宮辺音吉評伝を書き、1960年頃に学会賞をとる。

2. 1930年代前後、ファシズムと人民戦線の時代 この二人の人物に特に注目することは、この小説の多様な人物の挿話をもたらす気分や小説の全体像を紹介することにはまったくならないけれども、この二人の人物が小説に大きな思想的骨格を与えており、登場人物たちに厚みを与える役割を果たしていると思われるからである。またヨーロッパ社会思想に興味を持つ論者としては、政治経済や社会運動が生身の人間の営為であるということと、どのように関連して理解するのかに関心があった。

2-1. 父の足跡 物語は、1950年代の息子である私と、昭和10年頃から始まるその父親である私の少年時代の挿話が併行してすすむ。少年の父親は、役所を辞めて妻子を東京に残してアメリカとヨーロッパに農業経済の研究に遊学することになった。父からひさしぶりに息子に手紙が来るが、そのパリからの手紙には、ヨーロッパの政治情勢が記されている。1936年のフランスではファシズムの動きが急であり、社会党のレオン・ブルムがファシストのアクション・フランセーズの会員によりテロを受ける。こうした政治的混乱の中でフランス人民戦線が成立する。またスペインでは7月にフランコがモロッコで反乱するなどしてスペイン内戦が開始される。スペイン共産党の女性闘士ラ・パシオナリア（ドロレス・イバレリ）は有名な言葉、「彼らを通すまい（ノー・パサラン）」をスペイン人民戦線を守るべくラジオ演説するのである。

【ドロレス・イバレリは、スペイン北部のアストリアス地方の出身で、若い頃ニシン売り行商をしていたというので、あだ名を「ラ・サルディネラ」ニシン売り女というあだ名を付けられたという話もある。内戦後、サンチャゴ・カリリヨなどともにソビエトに長い間、亡命し、フランコ独裁体制終了後にスペインにもどり、国民的敬意を受けつつ、長寿をまっとうした。また「ノー・パサラン」という言葉は、かならずしも彼女が言い始めたオリジナルなスローガンでない。19世紀半ばにスペインであった最初の内戦ともいうべき、女帝継承問題に端を発したカルリスタ戦争のときに、カルリスタ党のスローガンの一つとしてすでに使われたことがある】。

また「青いろの場所からの挿話」（文庫第5巻、6巻）において私（父）のアメリカ、フランスの足取りを見ることができる。父は、1935年（昭和10年）に横浜からアメリカに出かけた。半年後（1936年）の父からの手紙では、フランスの人民戦線結成の動きなどのヨーロッパの政治情勢の新聞記事の切り抜きの訳が入っていた。「青いろの場所からの挿話」では、アメリカ行きの船客がアメリカに行く訳などの挿話、シアトルとおぼしき所での日本人移民の苦労話（これは荷風の『アメリカ物語』での挿話の手法を想起させる）。ワシントンに行き、労働運動など

を調査する中で、アメリカ人労働者たちのスペイン内戦への関心、ニューヨークでの調査の中で、ユダヤ人、イタリア人、黒人たちと組合運動とヨーロッパ情勢、スペイン内戦への参加の願望などが描かれる。父は1938年にフランスに渡る。そこで労働組合、活動家などを紹介され調査にいくが、日本の中国侵略と東亜新秩序宣言なども、それらの人々の中で話題になっている。時に、フランスの人民戦線は敗北し、ミュンヘン会談でナチズムの暗雲はいよいよ重くなってくるのであるが、父は次のような感想を持つ。

「フランスの労働者は明るい。日本の社会主義といえば、陰惨な忍苦のイメージがある」。「人民戦線がつぶれかかっているのにフランスの労働者は朗らかだ。友情に厚く楽しげなのは、何故かと問うて、これは組合の組織や給与体系、社会保障だけを調べても答えの出てくるものではなさそうだ。もっと社会の奥に根を張るフランス人の歴史、文化、気質を考えなければどうにもならない」

この父と同じような役割を小説で果たすのがもう一人の人物である宮辺音吉である。

2-2. 宮辺音吉の足跡「緑いろの場所」の狂言回しである宮辺音吉は、いわば在野の研究者となった人物である。「もともと宮辺音吉は、一定の学資があって勉学をつづけたというのではなく、アメリカに渡ったのも、下級船員としてであるし、アメリカからヨーロッパに移ったのも、さる富豪の秘書のような形で連れて行かれたのである」。

宮辺は1920年代から1930年代にかけてにイギリスやフランスの社会主義者、アナキストなどとの交流と労働体験の中で自己の思想形成を行っていった人物であり、「私」(子)は副論文の主題として宮辺の思想を追ううちにその足跡をたどる必要性を感じて、調査をおこなうという形で一部挿話が進んでいくのである。辻邦生がどうしてこうした人物を登場させたのか。この二人の人物は、欧米の政治経済、社会学的な研究をしつつ、官学留学ではなく自主留学のような形をとり、その価値判断の自由性を保持しており、その中身は当時の日本人知識人の平均的視点を遙かに凌駕したものになっているのである。宮辺音吉は、ロンドンでは労働運動や組合運動に関心をもった。

1926年に宮辺は、ドーバーの寒村に出かけている。宮辺の手紙にはドーバーの濃い霧のことがかかれていた。ロンドン時代の宮辺は大英博物館に通っている。フランスのブルゴーニュでは都市プロレタリアートと農民の関係を実践を通して観察した。パリではアナキストたちとも知り合った。また宮辺は「集会などで闘士風に振る舞っている男が家に戻ると細君の前で猫のようにおとなしくなるとか、万国の労働者の団結を呼びかけている男が美食を唯一の楽しみにしているとか」書き付けている。「宮辺のロンドンのノートには細字で経済理論や哲学の書き抜きが記されていたが、フランスにきてからのノートは、もっぱら、人物についての考察の記録が多くなっていく。宮辺音吉の社会主義の中に一種独特な響きがあるとすれば、おそらくこの頃の生活からの影響を無視できない」と作者は書いている。

「ミッシェリーヌと池でボートにのっているとき、ミッシェリーヌが私に日本での有給休暇について尋ねたので、休暇という観念がまだ労働者の側の権利として生まれていないのだ、というようなことを話した」。二年後にミッシェリーヌはマドリッドで、市民戦争のさなかの市街戦で流れ弾が彼女の額を貫いたのである。宮辺はフランス人民戦線のさなかのツールーズにおけ

る社会党と共産党の統一大会を見聞した。

ドイツではすでに国会放火事件があったが、1933に出かけたフライブルク大学ではハイデガーの講義を聴くことはできなかった。彼が学長になっていたので講義を受け持っていなかったからである。またミュンヘンで国家社会主義の実態をみた。

作者は記している。

「宮辺音吉の日記やノート断片の中にもファシズムの指導者、思想家に対する全否定的な言辞がもう少し見いだされてよいような気もするが、それが案外すくないのは、同時代というものは、ほとんど同時に他の声もかなり大きく聞こえるためなのだ。ファシズムの指導者が民族の団結と純血の誇りを訴えると、同じ日の別の新聞では民主的な国家機構を擁護する主張が展開されているという訳なのだ。問題は、その影響力、支配力、支持層などが、その二枚の新聞から、その二つの演説から、直ちに推測できない点にある。デモクラシーを擁護する声が一方に強く聞こえていて、新聞で読む限り、その主張は半々であるように見えても、時代の大勢はすでにデモクラシーを見棄てているということもありうるのである。」。「同時代というものは、決して歴史的な鳥瞰と等しい展望をもって現実全体を見ることはできないのである」「市内のユダヤ人の商店の襲撃は、宮辺音吉を含めて、それを狂信者の手になる不幸な偶発的な災難と見なしていたのだった」とある。

宮辺音吉がイタリアの労働組合運動を調べるためにミラノにいったのはエチオピア進入の翌年の夏ということなので、1936年である。1907年にノーベル平和賞をうけたエルネスト・モネータの親族がドイツでの友人であったので紹介されたからである。このモネータはミラノの旧家一族の人で、恒久平和主義の運動をした人物で、そのノーベル賞受賞演説を見ると、トマス・モアやカンパネルラのユートピア主義、カント平和論に共感を示している。宮野音吉はさらにトリノに出かけそしてミュンヘンに行く。再びフランスのブルターニュで港湾労働者の実態調査をし、ナントの商工会議所に行く。そして「きわめて保守性の強い資本家階級と人民戦線の将来にすべてを託している労働者階級とでは異民族同士のような懸隔と反発がある」と宮辺は書いている。

ストックホルムでは「何人かの組合関係者と会ったが、いずれも穏健な考え方をした人たちだった。彼らは社会主義にともなうインターナショナリズムに深い疑念を表明していた。たとえヨーロッパじゅうの社会主義者が団結したとしても北欧は独自の歩き方をするだろう、というのが当地の組合関係者たちの意見だった。

1936年8月カルチェラタンで三姉妹の物語では、「プロレタリアートのための住宅政策」のために取り壊されて音楽活動などができなくなってしまうが、その彼女たちはその政策を受け入れる態度を示すことが描かれる。最後に宮辺音吉は、日本に帰るマルセイユの港町で、船を待つ間にレストランで、売春婦らしき女と偶然隣り合わせて話しをする。私（子）によれば、その後、「宮辺音吉は、社会主義の中にいわゆる社会主義臭のない詩や芸術を導入しようと試みたことがあり、宮沢賢治や道元の研究論文があるとされている。

小説のエピローグは、フランコ独裁終了後の1970年代後半に青年の僕（孫）がフランスか

5 辻邦生『ある生涯の七つの場所』における社会思想家

らピレネーをこえて、バスでバスク地方のパンプローナからサラゴサに行く。

青年は親たちに比べると屈託がない旅行者である。たまたま道中でスペイン内戦に参加したイギリスの老人に出会い、イギリスの詩人マッシュウ・アーノルドの詩の朗読を屈託無く聞くとここでこの長い物語は終わるのである。アナーキズムを信奉するこの詩人の詩を登場させることで作者はこの長い小説を締めくくったのである。

[出所 <http://www.valley.ne.jp/~ishizuka/>]